

フェローシップ・ニュース

NO.34号

国際協力活動がスタート！

5/24 フィリピン・マニラへ出発します！！

2009年5月1日、正式にJICA（国際協力機構）との契約が締結しました。第一弾として5月24日から30日までプロジェクトメンバー7名が現地を訪問します。現地ではオープニングセレモニー、キックオフミーティングを開き、カウンターパートのリハビリ施設（ファミリー・ウェルネス・センター）職員、保健省、教会関係者、現地NGO団体などこのプロジェクトに関心を持っている方を招いて、これから始まる活動について話し合いの場を持ちます。

第1回目の訪問の大きな目的は、貧困層の中で開催する「アパリミーティング」の会場を確保すること、その環境を整えるコアメンバー5名の候補者を選定することです。選定にあたって、主に薬物依存症からの回復者で、12ステップを理解している人を考えています。

コアメンバーに対して今年の9月と来年の9月にそれぞれ2週間、日本に招いて研修を行います。上野の日本ダルク、藤岡のアウェイクニングハウスで仲間とともに生活をし、プログラムを一緒に受けてもらいます。その際に多様なワークショップを企画し、また各地のダルクフォーラムにも参加してもらう予定です。

わたしたちはこのような活動の機会を与えられたことに感謝し、わたしたちの出来ることの全てを出し尽くし、活動を全うしたいと思います。

アパリ東京本部は5/25（月）～5/29（金）の間お休みいたします。
急用の方はメール info@apari.jp までお願いいたします。

アパリ・薬物問題訪問サポートを始めました

アパリのスタッフが訪問いたします

これまで薬物問題に対して、ご本人やご家族が相談機関などに出向かなければなりませんでした。しかしその負担は大きく、十分な支援を受けられない方も多くいらっしゃいます。特に、ご本人・ご家族が薬物問題に対しどのように対処したら良いのか迷っている場合、何の支援も受けられないままです。

アパリ・薬物問題訪問サポートでは、援助を求めている人のところへ、薬物問題の専門スタッフが出向きます。

ご本人・ご家族のお話を十分にお聴きします

アパリ・薬物問題訪問サポートは、ご本人・ご家族のお話を十分にお聴きします。それは、ご本人・ご家族のお考えやお気持ちが何よりも大切だと考えるからです。お考えやお気持ちがまとまっていなくてもかまいません。

ご本人が希望すれば、リハビリ施設の橋渡しを行います

アパリ・薬物問題訪問サポートは、ご本人が希望すれば自助グループ、リハビリ施設（ダルク）、病院への連絡・調整・仲介など具体的な援助を行います。地域にある様々な機関・施設の情報を収集し提供します。

また、ご希望があれば、ご本人・ご家族と一緒に機関や施設などに同行します。ご本人が訪問援助を求めない場合、相談室でご家族のみの面接もできます。

訪問費用・・・1時間（スタッフ1名）1万円～
移動費（交通費含む）が別途かかります。

お問い合わせ・お申し込み：アパリ東京本部03-5830-1790

特定非営利活動法人
アジア太平洋地域アディクション研究所

発行日
2009年5月1日

APARIとは、アジア太平洋地域アディクション研究所（Asia-Pacific Addiction Research Institute）の略称です。

全国のDARCやMACの各施設、福祉・教育・医療・司法関係者と連携しながら、依存症から回復しようとする方々を支援しているシンクタンクです。

目次：

JICA進捗状況 アパリ薬物問題訪問サポートご案内	1
タイ王国における薬物乱用に対する初期介入の取り組みについて・・・嶋根	2
薬物依存症と家族の対応について・・・町田	3
仲間のメッセージ「幻聴」・・・清華	4
入寮者からのメッセージ・・・アフマッド	6
インターナショナルデー新規会員募集中	7
アパリからのお知らせ	8

タイ王国における薬物乱用に対する初期介入の取り組みについて

嶋根 卓也

(国立精神・神経センター精神保健研究所薬物依存研究部/アパリ非常勤研究員)

1. 予防は治療に勝る

英語には、Prevention is better than cure. (予防は治療に勝る) ということわざがあります。これは薬物依存にも当てはまります。つまり、薬物依存の状態になった状態から回復を目指すことの困難さを考えれば、より早い段階で薬物乱用を予防する方がトータルで考えるとプラスに働くということです。これは、疾病の予防を目的の一つとする公衆衛生学にも通じることわざです。

予防といっても、様々な段階での予防があります。日本で、最も力を入れているのが1次予防でしょう。これはいわゆる「ダメ。ゼッタイ。」的な取り組みです。つまり、薬物に手を出させないための健康教育や啓発活動が中心となっています。幸いにも、日本の若者の薬物乱用状況は、諸外国に比べるとかなり低く、こうした現状を維持していくためにも、1次予防は今後も続けていく必要があります。しかし、これまでの調査研究により、実際には薬物乱用と関わりを持っている青少年が少なからずいることが明らかにされています。また、大学生の大麻事件などがメディアで取り上げられる機会が増えておりますので、すでに薬物乱用と関わりを持つ若者へのアプローチをどうしたらよいかと、関心をお持ちの関係者も少なくないのではないのでしょうか。

もちろん、何歳から薬物乱用を開始しても、薬物依存になるリスクはあります。しかし、より若年で開始される薬物乱用は、発達段階にある脳に対して重篤な影響を与え、その後の深刻な薬物依存につながりやすいとされています。私は、このような観点から、薬物乱用の初期段階にある若年者へのアプローチについて関心を持っています。つまり、「薬物依存の予防」という視点から考えれば、若者の薬物乱用に対して、社会的制裁を加えるだけでは十分とは言えず、早期発見・早期介入という治療的なアプローチが求められるでしょう。

しかし、実際のところ、日本ではこの領域(若年者の薬物乱用に対する初期介入)の取り組みは未整備の状態、教育機関等の関係諸機関でも手探りの状態が続いています。そこで、私は厚生労働科学研究の一環として、昨年10月に、タイ王国(以降、タイと表記)を訪問し、現地調査を行いました。今回から2回に渡って、タイでの取り組みの一部をみなさまにご紹介したいと思います。日本での取り組みを考える上での情報提供になれば幸いです。

2. なぜ、タイ?

では、欧米先進諸国ではなく、どうしてタイに?と思われる方もいらっしゃるかも知れません。これにはいくつかの理由があります。まず、タイでは2002年に制定された薬物乱用者更生法(Narcotic Addict Rehabilitation Act B.E.2545)により、薬物乱用者に対して刑罰を科すのではなく、当該者を治療プログラムに乗せ、再乱用を予防するという基本的なスタンスが確立しました。これにより地域(村落部、学校、寺院など)から、医療機関への道筋ができました。この法律下での実際の取り組みを見学してみたかったというのが一番の理由です。

さらに、覚せい剤がタイの薬物問題の主流を占めていることも、タイを選択した理由の一つです。かつては、アヘン系麻薬(ヘロインなど)の問題が北部のゴールデン・トライアングルを中心に広がっていましたが、現在では、Yaba(ヤーバー)と呼ばれる覚せい剤系の中枢神経刺激薬が流行しています。このYabaは、特に若年層での乱用が問題となっています。このような薬物乱用状況の類似性もタイを選択した背景となっています。

3. 公立病院と精神科専門看護師

今回の訪問の窓口となったのが、タイ北部チェンマイ県にある郡立病院(公的な医療機関で、日本でいう市民病院のような位置づけ)でした。タイは、75県とバンコク首都府から成り立っており、チェンマイ県は、その一つです。チェンマイ県下には24の郡(アムプー: district)があり、さらに下部に204のタムボン(sub-district)という行政単位に分かれています。各郡には、郡立の病院があり、サービスのクオリティの差はあれ、全国約800箇所あるすべての郡立病院で薬物乱用・依存の治療が提供できる体制となっています。

左の写真は、今回訪問した郡立チョームトン病院(Jomthong hospital)内のメンタルヘルスユニットです。ここは、一般内科・外科などを扱う本棟とは独立したセクションで、入院設備はありませんが、薬物乱用者に対する個別カウンセリング、グループカウンセリング、再乱用を予防するための認知行動療法(Matrixプログラム)などが外来で提供されています。仏教国ということから、僧侶による説法も治療プログラムの一環として取り入れられていました。

このメンタルヘルスユニットで活躍している職種が、精神科専門看護師です。タイで精神科専門看護師になるには、まず看護教育を4年受けたのちに、2年間の修士課程を終え、精神科看護師になる必要があります。その後、さらに登録試験をパスすることで、精神科専門看護師(Advanced practice nurse in psychiatric nursing)となります。臨床業務に関わると同時に、病院での調査研究や開発の業務も任されるようになる大変忙しい人たちです。彼女たち(男性もいるかも知れませんが、私はまだ男性の精神科専門看護師に出会ったことがありません)の活動は病院にとどまりません。病院を飛び出し、学校、寺院、地域の保健センターなど、様々なセッティングで、薬物乱用者を治療にさせるための努力や工夫が行われています。次号では、これらの地域での取り組みや、連携体制について具体的にお話したいと思います。

National Institute on Drug Abuse (NIH Pub No.07-5605): Drugs, Brains, and Behavior-The Science of Addiction. 2008

嶋根卓也, 和田清, 三島健一, 藤原道弘: 大学新生における薬物乱用実態に関する研究. 平成20年度厚生労働科学研究費補助金(医薬品・医療機器等レギュラトリーサイエンス総合研究事業)(H19-医薬一般-025)「薬物乱用・依存の実態把握と「回復」に向けての対応策に関する研究(主任研究者: 和田 清)」



写真1 精神科専門看護師
チェンマイ県郡立チョーム
トン病院内のメンタルヘル
スユニットにて



写真2 チェンマイ県郡立
チョームトン病院院長
(右後方)との面談

家族のための連続講座

薬物依存症と家族の対応について(11)

「回復の両輪」

カウンセラー 町田政明

本人が回復するには、本人の力だけではできません。家族の力が必要です。まず、否認の病気といわれますから、本人はこの病気を認めませんので、家族が勉強をして正しい対応をしないといけません。そして、本人が治療につながり回復の道を歩み始めたら、それに応じた家族の支援や接し方があります。そのために家族はさらなる勉強と今までとは違った対応を求められます。

歯車の違い～回復のスピード

最初にこの病気に気がつき勉強を始めるのは、家族の場合が多いと思いますが、刑務所や病院に入り、本人が先にこの病気に気がつき、勉強を始める本人もいるとは思いますが。

まず家族が勉強を始めて、少しずつ正しい対応を学んでやることにより、本人が登場するなり、何かの事件、例えば薬物の違法所持などで捕まり登場せざるを得なくなります。

施設や病院に繋がり半強制的に勉強するうちに、本人はどんどん回復していきます。回復のプログラムが自分の中に入って行くのです。目に見えて本人の回復が見えます。

そうすると家族の勉強を追い越してしまいます。今までは家族の方が多くの知識を身につけていたのですが、本人の回復に追いつかなくなっていく。なぜならリハビリ施設に入ると、1日3回のミーティングに強制的に出席させられて、仲間のミーティングの中でプログラムがどんどん入っていくからです。家族は1～2週間に1回程度のミーティング出席であり、回数が圧倒的に違います。ですからそれが回復の差として現れてきます。仕方がないことです。

歯車がかみ合わない～回復の難しさ

お互いの歯車の違いから、回復の違いといっても良いかと思いますが、お互いが噛み合わなくなり、それを自覚できるほど本人が回復をすれば良いのですが、家族より回復が進んでいるといっても、病気の深さや病気の根強いものがあり、家族の回復の遅さにつけ込んで依存しようとしてします。そうするとまた家族は巻き込まれます。

元々歯車が違います。本人は薬物依存であり、家族は人嗜癖です。人嗜癖とは人依存のことであり、人に依存する悪い癖、共依存の事を指します。

回復の違いもあり、噛み合わなくて当然だと思います。家族の場合は、勉強して本人を施設や病院に入れたのに、帰ってくると受け入れてしまいます。あれだけ困って無力で藁をも掴む思いでお願いしたのを、いつの間にか忘れて、何とか手助けしなければとか、今度は本人も少し勉強したから何とかなるのではないかと、家族が世話しなければ誰がするのかとか、家族の共依存にスイッチがまた入ってしまうのです。

人嗜癖の快感～共依存

この病気薬物依存や人嗜癖を、本人も家族も甘く見ています。薬物、特に覚せい剤は一度やると止められなくなると言いますが、人嗜癖も強烈なものがあります。人間には薬物の本人も含めて、人をコントロールしたいという欲求ほど、私たちが魅了するものはないのかもしれない。相当な快感なのだと思います。

歯車が噛み合う～本人と家族の関係修復

本人と家族が回復のプロセスで、お互いの歯車が噛み合うのは至難の業です。ですから、お互いの回復のために離れていて自分自身の回復だけに専念するのが、簡単で楽なやり方だと思います。歯車が噛み合うのには、数年の年月がかかると思います。本人の状態によって違いますが、薬物依存症の家族の場合には5年は会えないと覚悟してくださいと言っています。

実はお互いの歯車が合うようになるのは、ほとんど難しいのが現状だと思います。このようになるのは奇跡に近いかもしれません。何しろ本人の回復そのものが奇跡といわれています。本人と家族がお互いに回復して、歯車が合うのはもっと奇跡的なことかもしれません。でも数少ないけれども、そのような奇跡を実際目にしています。

しかし奇跡に近いことですから、基本的にお互いに理解し合うのを諦めて、お互いに自分の人生を生きるのが良いと思います。

家族の体験記
好評販売中！

『ギャンブル依存症に悩む
家族の物語
～絶望から希望へ～』

この本には、ギャンブル依存症で悩む8人の家族の体験が綴られています。これは真実の物語です。家族の貴重な体験を知ることができる貴重な一冊です。

定価：1,000円
発行：ホープヒル
(アパリで販売中)

中学・高校・大学へ
の出張講演

最近とはくに若年層の大麻使用をはじめとする薬物事犯に関連する相談が目立っています。

そこでアパリでは各教育機関での講演活動を行い、増加傾向にある若者の薬物依存の予防啓発・早期発見・早期介入の実現を目指しています。

講演内容の一例

- ・薬物依存症者による体験談
- ・断り方のロールプレイ 等

内容・時間とも相談に応じます。講師料など詳細はお問い合わせください。

TEL:03-5830-1790

メ-ル: info@apari.jp

社会復帰した仲間からのメッセージ 「幻聴」

清華

過去にさかのぼること7年前、「協力願い」と題した下記の文章を、2002年2月22日私自信が書き残し、幻聴によって壊れた自分の悲惨さを日記方式で書き綴ったグロテスクな資料とともに、私は救われたい一心で脳や音の研究機関や研究者、国内外をかまわずメディア、ひいてはオカルト系集団にまでばら撒いていた。

協力願い

音声録音、抽出、分析、解析、再生、合成のための協力願い。とりたい音源が音波、ラジオ波、電磁波、パルス波、超音波、超低周波、放射能波、光波のどれを用いて発生させられた音響素子なのか、またそれ以外の何かわからないが、私は特定多数の日本人男女十数名に音や声を24時間、約2年間程きかされている被害に遭っている者です。盗聴、盗撮に始まり、読脳、占脳、声の脳内入力による思考や行動欲求の強制製造、人工拷問夢、肉体操作、精神操作、ストーキング、嫌がらせ、、、警察にも医者にも探偵にも相談しましたが、何者かの正体を証明する証拠がとれないので、今の私は精神病人です。音や声は耳を塞いでも、水中にいても、睡眠中でも、無音室にいても、作為によって私の脳に直接発生させられています。何処で誰に話しても幻聴の一言で済まされ精神の病みは止まりません。私以外の他人にはきこえないようです。この犯罪行為は私以外、例え一緒にいても気が付けないものです。証拠を証明できないために私はどうすることもできません。

「犯罪の被害者である私は証拠、すなわち客観でわかる声の証明がしたいのです。」
研究者の方にはこの“何か”の音声を証明できることは新しい発見になり、私は救われ、発見者には研究に値する新しい音声信号になると予測します。私のために、犯罪行為を裁くために音や声の存在証明をお願いします。

初めてのドラッグは、当時、上野の不法滞在イラン人から気軽に買えたチョコ（大麻樹脂）だった。酒もタバコも当たり前になったいた19歳、抵抗などなく、好奇心とカッコつけの後押しでバイトの先輩と共に。今でも覚えているんだよね。あの笑いが止まらなくなって、頭の思考がどんどんクリアになって、何事も悟ってしまえるかのように決まっていく感覚。そして死んだ様に眠りに就いていながら、目覚め感じたあの朝日の眩しさ。まるで生まれ変わったかのごとく人生観が開けてしまった。

この日以来、全ての優先順位が一番に薬物は入り込んだ。（ような気がするのです。）大学では息抜きに隠れて屋上で一服。ナイトクラブでも酒の代わりにジョイント、出会う人全員マリファナを吸い、吸わない人とは付き合えなくなっていった。アジア極貧旅行でもお土産の代わりにご当地ドラッグ体験談を持ち帰った。オピウムにLSD、マジックマッシュルームにエクスタシー。どれも新鮮だった。体への刺激がとても気持ち良かった。全ての日常は、ドラッグを効かしての経験により非日常になり彩りを帯びる。こんないい物、知って良かったと。

学業を終え、世間が就職、仕事、自活の段階に突入する中、しごく当然の成り行きでドロップアウトの旅、放浪へ出発。家族や友人にも、口先だけのカッコつけで納得させる頭は完全に出来上がっていた。放浪は上手くいっていたしこれ以上ないほどの成功を体得したと思っていた。ドラッグ革命ができると信じていた。あの日までは。

2000年12月8日、深夜人気のないシドニーの公園、おぼえた大道芸を人知れずドラッグで飛びながらしていた。すると、突然、忘れていた日本語でひそひそ私の事を話す声が聞こえてきた。人影はない。日本人も私一人だった。でも聞こえた。女の声で日本語訛りの「ファック・ミー」と確かに。探した。「誰かいますか？」と1年半ぶりの日本語で尋ねても返事はない。でも声は確かに聞こえてくる。前から後ろから右から左から。誰も見えないオーストラリアの深夜の公園で実体のない日本語の持ち主達が次々と話し掛けて来る。「カメラで撮っている」とか、「世界中が見てる」とか。そして、頭の思考が声になって聞こえてくるもう一つの声を聞いたそのとき、私は発狂して感情を壊し、泣き崩れ、訳が分からなくなった。

放浪は彷徨いへと知らずのうちに変化していた。帰国するつもりでいたが、香港、中国、マカオと彷徨う。飛行機で国をまたいでもドラッグは密輸した。24時間1分1秒さえ絶え間なく聞かされる声に見張られ処分する隙がないという理由であったが、事あるごとに使い、やめて、また使い、ドラッグライフを続けた。革命は知らず知らず崩れていく。ドラッグではないが、香港では警察に、中国では軍に、不審者として捕まる。優しい女性との

「薬物依存」 DVD販売中！

アパリが作成したDVDで本人の体験談や、近藤恒夫の話が約30分間収められています。学校での薬物乱用防止教育、行政の職員の研修で利用されています。

1枚 3,000円

FAX : 03-5830-1791
メール: info@apari.jp

ご希望の方はご住所、お名前、電話番号をご記入の上お申込下さい。

平成12年作成

巡り合いでようやく帰国できたが、もうボロボロだった。出発時は綺麗な身なりと希望に溢れた身支度であった私は、帰国時はドレッドヘアーに汚れと匂いのキツイ身なりを固め、持ち帰った身支度品に実用的なものは無かったように記憶している。

日本語で聞こえてくる幻聴に対して、日本人の国、日本は苦しかった。目に映る誰でもが私の頭を覗き込み、口々に噂をしている様な錯覚に陥った。狂った思考と幻聴のせいで、もはや私は人間としてのモラルを持ち合わせる事などできずにいた。人を見ては、こいつが幻聴の親玉か!?!と疑い、街の全てが、混乱する精神をさらに困惑させる要因に繋がった。

気付いていなかったが、自己責任で終わらない問題を起こすようになった。街ではドアを蹴破り、看板を潰す事が増えた。遂に姫路でLSDにまかせて怒り狂い暴走していたその現場で逮捕された。たまたま張っていた警視庁24時系の撮影隊に撮られ、妄想が現実になった。ラッキーだかアンラッキーだが、3日程で釈放。そして、彷徨いも終わらされた。

ボランティア活動を足がかりに仕事に就いた。しかし、ドラッグとはいい距離感を保ち続けた。幻聴が終わるまでは止めようと。幻聴を理由に仕事はとても辛いものであった。自ら精神科の扉を叩いた結果、幻覚、妄想状態のため親元での治療に専念するようといわれる。しかし、病識と自覚は無かった。実家にもどり治療に入ったが、医者に信用を任せることができなかつた。処方箋は苦痛をとめない、家族への暴力から医療保護入院となる。拘束器具で縛られた私はこの世に希望がなく、ただただ幻聴の声の主を探し続けた。入院を利用してかねてから興味があった脳波を測定してもらったが、異常無し。ただ、病名が「精神作用物質の幻覚剤作用における精神及び行動の障害」となる。転院先の病院でNAという全く分けのわからない薬物の自助グループ会に行かされた。NAの帰り、万引きでつかまり転院先を一日で退院させられる。実家からも勘当にあい、どうしようもなく、区役所の生活保護課に拾われる。時間とお金に自由が利くようになり、DARCに通う事になる。NAにも通った。しかし、そこに意思とやる気があった訳ではなかった。ただ時間が許すだけだったので続いたのだろう。幻聴は消えなかった。精神は病む一方で夢遊病になり、また入院となった。

今思うと、この時期ある種の落ち着きが出始めた様に思う。協力願いを書き上げ、向かう方向はどうあれ、過去を見直していたからだ。しかし、ただ1つだけ大きな間違いを棚上げした。それはドラッグだ。ドラッグは悪くないとかたくなに確信していた。

DARCとNAのかいあって、憂さ晴らしができるようになると生活保護のお金を使い、またドラッグを使い始めた。毎月決まった額の安定した資金は、ドラッグのコントロールを綿密化させるのに役立った。気が付けば放浪生活日本版、スポンサード・バイ・生活保護費withチョロチョロ仕事する。当然DARCとNAにはフェードアウト、昔のドラッグフレンドに結びつき、約3年やりたいただけやった。

しかし、長くは続かない。どうしても幻聴が消えないのである。そこで、何を思ったのか私は、彷徨い始めたころの愛だと感じてきた感情に突き動かされ、帰国を助けてくれた女性に会いにヨーロッパへ逃げた。ドラッグを売って得た数万と、パスポート、女性の住所、それだけで十分だった。ロシア、ドイツ、オーストリア、イギリスと目的も見失い彷徨った。幻聴は既に私を支配していた。結局ドイツで警察に保護され、またまた病院送りとなる。大使館員の護衛と共に現れた父は勘当のことは忘れたように、日本まで寄り添ってくれた。

強制送還された私はもう何もかもが駄目だった。何の気なしに装った外出用の荷物に、マリファナが混入していて逮捕される。

3ヶ月の留置・拘置の後、執行猶予4年で裁判を終える。嘘みたいな話だが、捕まっている間に反省をした。ドラッグは大きな問題であると認めた。

すると、どうだろう。再度DARCとNAに足を運ぶようになり、全く意味のないと決め付けていたところがとても居心地の良い空間になり、少しずつだったが、ドラッグから開放されて行った。

仕事も続くようになり、人間性も取り戻してきている。私の大きな問題はDARCやNAの仲間の中では皆経験する事であり、分かち合う事により仲間が解決してくれる。いつしか幻聴が聞こえない自由な時間すら発見できてくる様になっている。社会においてもドラッグとは無縁の人達とも交流がもてるようになってきている。回復自身が生きる希望の今、ドラッグなしの人生の素晴らしさは何物にも変えがたい。

この回復の中で私は今人生最高の贈り物を得て、毎日を送っている。

執行猶予が明けたばかりの私だが、今では4ヶ月の愛娘をあやす妻を見つつ、休日を家庭で過ごす父になっている。

ターニング・ポイント

受刑経験のある
ダルクスタッフによる
最新の体験談

Drug Addiction Rehabilitation Center

薬物依存症リハビリ施設 ダルクからのメッセージ

TURNING POINT

ターニング・ポイント

日本ダルク本部 編

12名の体験談と漫画体験記が載っています

1,000円

ご希望の方はご住所、お名前、電話番号をご記入の上お申込下さい。

FAX : 03-5830-1791

メール: info@apari.jp

平成21年作成

アウェイクニングハウス 入寮者からのメッセージ

「CHANGE MY LIFE」

アフマッド

アパリ発行
「Born・Again (ボーン・アゲイン)」
体験談 販売中!

2005年5月に第2版が発売になりました。体験談が13人分収められています。アパリではこの本を拘留所や刑務所にいる人への差し入れ用として使っています。

定価：1,500円
(会員価格：1,000円)

お申込はメールかファックスで
FAX：03-5830-1791
メール：info@apari.jp
ご住所、お名前、お電話番号をご記入の上お申込下さい。

「アナタ マイニチクル ホント カラダキヲツケテ」小さく折りたたまれた紙片を手にしっかりと握りすぐにその場を後にする。いつものゲーセンに向かう。足取りは自然と早くなる。真直ぐにトイレへ。“清掃中”またこのパターンかよ。「店員のヤロー、俺様への嫌がらせか!!」周囲に誰もいないのを確認して女子トイレへ滑り込む。洋式のフタを閉めてその上で紙片をこぼれないように開く。純白のヘロイン2回分だ。財布の中からストローを取り出して人差し指と中指に挟む。タバコを持つのと同じ要領だ。それを左の鼻の穴に突っ込む。親指で右の鼻をふさいで「スー」一気に吸い込んでしばらくすると体全体が熱を帯びてきて何とも言えない多幸感が沸いてくる。「ヘロイン最高〜」

高校時代に覚えたマリファナを極める為に色々な国を訪れた。タイのチェンマイで三輪タクシーの運転手ポーンチャイと仲良くなり彼から3つのドラッグを買った。100gのガンジャと20gのヘロイン、10gのアヘンそれでたったの3万5千バーツ(約一万円)だ。ヘロインを吸った後に訪れるSEXなんかよりも濃密な快感にひたった俺はパッポンの夜の街を徘徊した。途中でネパールのポカラ、カトマンドゥへ飛び、チョコレートをお腹一杯吸って、40トラをコンドームに包んで飲み込み東京へ戻った。約3ヶ月の旅だった。

東京へ戻ってからヘロインの虜になっていた俺はイラン人の溜り場に毎日のように通い、2回分で1万円のヘロインをかった。随分前にイラン人が大挙来日して、駅前や付近の大きな池のある公園にたむろしていた。昼間からダボダボで裾の細くなっているズボンをはいたイラン人がうろうろして、歩いている人達にしきりに声をかけている。偽造テレカ、チョコ、アヘン、ヘロイン、シャブなどを売っているのだ。あいつらはブロンが好きで、ヘロインを買う俺に、ブロンはいいけどヘロインはやるなとしきりに言っていた。ふざけた奴らだ。一回大変な事があった。いつもの様に駅前のレストランの階段の踊り場でブツを受け取り、スクランブル交差点を渡り切った直後にトレンチコートを着た男に肩を叩かれた。その瞬間、俺は手を開いてブツを落とした。「君、今イラン人と一緒に階段昇って行ったでしょ。何買ったんだ」「テレカです」「本当ウ〜」「ハイ」「詳しく話を聞きたいんだ。近くに交番があるから」「ハイ」。

ヘロインをやり続けて半年位経つと、次第に体が悪い方向に変調していくのを感じるようになってきた。いつも頭がボーっとして何も考えられなくなる。効き目が切れると体が重くて動くのがおっくうになってくる。一年近く使用していると状態はもっと酷くなる。痩せこけ、顔は真っ青、体の中をウジが走り回っている様な感覚、ベットから起き上がる事が出来ずずっと寝たきりになり、トイレへ行けずお漏らししてしまう。でもヘロインをやるとその状態がピタッと止まるので止められない。

ある朝、息苦しさで目が覚めた。喉から肺に何かが詰まった感じがして呼吸がうまく出来ない。誰かに首を絞められている様な感じだ。「うー苦しい。助けてくれ」窓枠に両手をついて一生懸命に深呼吸しようとしたが出来ない。心臓の鼓動がみるみる速くなりそれがMAXに達した時、意識が途切れた。次の日の朝気が付いた俺は「もうこれ以上ヘロインをやり続けたら多分死んでしまう。ヘロインだけは2度とやらない」そう誓った。KING OF DRUGであるヘロインを止めるのはそう簡単ではない。そこでリン酸ジヒドロコデイン入りのブロンを飲んで誤魔化す生活が始まった。ブロンはソフトなスピードボールと同じだ。体全体がホンワカと気持ちよくなるのはアヘン、ヘロインと似た作用があり、塩酸メチルエフェドリンは覚醒剤の原料である麻黄から抽出される。だから頭もクリーンになりペラがよく回る。それにチョコ、ガンジャは元々大好きだから止める気がない。更にこの時期、その後の人生に大きな影響を与える覚醒剤と知り合ってしまうのだ。

大学を6年かけて卒業した俺は大手の銀行に就職した。入行して配属した支店はオフィス街の大きな支店だった。本店や大きな支店への配属は出世コースに乗るには大切なことだ。実際に俺の配属先の支店長に就くと2~3年勤めてから本店の取締役という流れが出来ている。エリート意識の高い奴らが揃った職場は正直俺には向いてなかった。どうでもいい雑用ばかり押し付ける癖に肝心の仕事は忙しい振りをして教えてくれない。やたら厳しい事を言う奴や、自分がいかに仕事出来るかを自慢する奴、自分のミスはまだ何も分からない俺に転化する奴、俺は日に日にテンパってきた。「この若ハゲ集団め。ふざけやがって」当初は仕事の終わった後に使っていたドラッグも次第に仕事にやる様になっていった。命取りになるようなミスを連発し、女性問題やその他トラブルを起こした俺は次第に支店に居づらくなっていた。「もう嫌だ。辞めてやる」3年目の春に退職した。退職してから俺の薬物乱用度はもっとひどいものになっていった。

覚醒剤を注射器で打つのを覚えたのはこの頃からだ。針を血管に挿しゆっくりと人差し指で押す。この一連の動作は本当にはまる。シャブを血管に入れてから5秒くらいするとスワッーと全身に一瞬の快樂が走る。一番最初に打った時は頭髪が逆立ってスーパーサイヤ人になった。「こりゃーやめられねえー」

仕事を転々としながらドラッグの乱用はとどまるところを知らなかった。36歳の春、覚醒剤使用による女性問題で初めて警察にパクられた。「お前は本当にエロいやろーだ」取調べ中いつも刑事に言われた。そして4ヵ月後に2度目の覚醒剤取締法違反での逮捕。懲役2年10ヶ月の刑期で服役し、半年の仮釈をもらって施設に繋がった。俺が懲役の間に母親からA P A R Iを紹介してもらい、通信プログラムを勧められた。毎回送られてくるフェローシップニュースを読んだり、通信カウンセリングを通して俺のドラッグに染まった人生を再考する良い機会を与えられた。釈前の時、教育担当の金線のおやじが俺を呼び、アパリの薬物通信プログラムについてどういったものなのか聞いてきた。そして薬物使用の意見を交わした。「お前は薬物の事を真剣に考えている。二度と刑務所に入る事はないと信じている」そう言われた時、俺は心からおやじに感謝の気持ちを伝えた。「ありがとうございます。これからの人生2度と薬物に頼らない様に生きていきたいと思えます」

今、施設に来て3ヶ月。出所して入寮した頃と比べて何かはっきりとは分からないけど、自分の内面の変化を強く感じている。朝と昼間の各一時間のミーティングでは12ステップを身に付けたり、テーマを作ってそれについてフリートークする。思っている事、その時感じていること話せばOKだ。仲間の話から色々なヒントを得られるし、一体感を感じることが出来る。昼食後はエイサー（琉球太鼓）の練習をやる。流れる様な踊りを加えた太鼓は本当にかっこいい。一生懸命練習して早く人前でやってみたい。その他全員に係の様な役割をくれる。俺は施設の車や施設内を綺麗にする清掃係をやっているが、それ以外にも仲間の頑張っている事を少しサポートしたりもする。仲間は皆助け合って生活する事を学んだからだ。当初はプログラムに対して色々な不満を持ち「こんな所に居てもしょうがない」と思っていたが、本当に良い仲間巡りに巡り会い仲間の手助けが今の自分を支えている。そう思っている。楽しい仲間と昔クスリを使っていた頃のバカ話で盛り上がる。そんな生活に今は十分に満足している。

ドラッグ・ダイヤル

最近若い人からの大麻の相談が増えています

こんな質問が多いです。
「何で大麻はダメなの？」
「どんな害があるの？」
「止めようと思うんだけどどうすればいいの？」

どうぞお気軽にご相談ください。
(プライバシーは固く守られます。)

電話相談は
月～金の10時～18時
：03-5830-1790

メールでの相談は随時受け付けています。
メ-ル：info@apari.jp

インターナショナルデーで琉球太鼓を披露

晴天に恵まれた4月26日(日)東京カテドラル聖マリア大聖堂で、第18回インターナショナルデーが開催されました。国境を越え日本で生活している、国籍の違う人たちが集うこの祭典でダルクの琉球太鼓(エイサー)が披露されました。千葉、袖ヶ浦、横浜、川崎の各ダルクの選抜メンバーに加えアウェイクニングハウスからも4名が出演しました。天にも届くような太鼓の音が大きな声援と大きな拍手に包まれました。

カテドラルの中では国際ミサ、様々な国の模擬店やワールドバザーが行われ、世界各国の言葉が飛び交い活気溢れるイベントになりました。



🌸🌸🌸🌸 新規会員 募集中 ! 🌸🌸🌸🌸

平成21年度の新規会員(正会員・賛助会員)を募集します。ご入会していただいた方には、会報「フェローシップ・ニュース」を毎号お届けします。また、書籍購入の割引や公開講座・フォーラム、自助グループ開催に関する情報提供等、様々な特典がございます。アパリは立ち上げて10年目に入った組織です。今後も、薬物関連問題の新たなシステムとネットワーク構築のために全力を尽くしていく所存です。アパリに関するご意見ご要望がございましたらいつでもご連絡ください。既に会員の方には継続のご案内をお送りしています。

【年会費】 正会員：12,000円 賛助会員：6,000円

【期間】 平成21年4月1日～平成22年3月31日まで

【郵便振込】 番号：00160-7-136870 アパリ東京総本部

アウェイクニングハウスとは振込み先が異なりますのでご注意ください。



特定非営利活動法人
アジア太平洋地域アディクション研究所

アパリ東京本部

〒110-0014
東京都台東区北上野2-2-2
電話：03-5830-1790
FAX：03-5830-1791
Email：info@apari.jp

アパリ藤岡研究センター

(運営：日本ダルク アウェイクニングハウス)
〒375-0047
群馬県藤岡市上日野2594番地
電話：0274-28-0311
FAX：0274-28-0313

【入寮条件】

- 1、薬物依存から回復・自立しようとしている本人
- 2、男性(年齢制限なし)

【入寮期間】

基本的に13ヶ月

【入寮費】

月額16万円(初回17万5千円、生活保護の方も可能)



ホームページもご覧ください
<http://www.apari.jp/npo/>

発行者：近藤恒夫
編集責任者：志立玲子
平成21年5月1日発行
定価 1部 100円

<アパリの司法サポート>

《薬物事犯で逮捕された刑事被告人に対する支援》

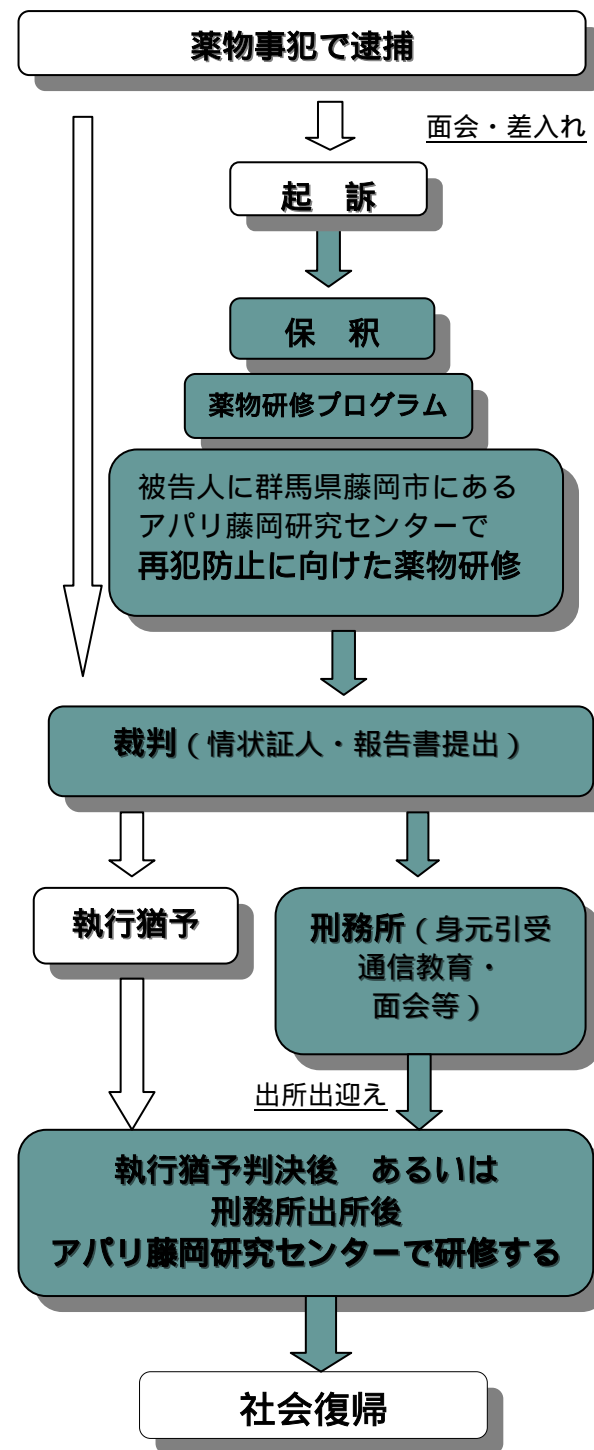
薬物犯罪で逮捕されたら刑務所に行くか、再犯防止に向けた何の取り組みもないまま執行猶予の判決をもらって、また薬物のある日常に戻るしかない日本において、**はじめて刑罰以外の再犯防止に向けた取り組みです。**

保釈中の刑事被告人に対する薬物研修プログラム、情状証人出廷、上申書作成、入寮契約、身元引受契約、出所出迎え、法律相談などあらゆるニーズにお応えします。なお、日本における薬物事犯の再犯率は50%ですが、アパリの司法サポートを利用された方の再犯率は**5%以下**です。最近では特に、**受刑中に身元引受契約をし、仮釈放又は満期釈放の時に**出迎えに行き、リハビリ施設に繋げるお手伝いをしています。

[費用：コーディネート料として一律20万円。但し、東京以外の地域は交通・宿泊費の実費が必要です]

【お問合せは東京本部まで】

アパリの支援



<アパリ・家族教室> 6月より第4月曜日も開催します

日時	テーマ	ファシリテーター
5/4(祝月)	依存症は治るのか?	町田 政明
5/18(月)	家族のできることでできないこと	町田 政明
6/1(月)	体験談「回復とは?」	畑 由宇(日本ダルクアウェイクニングハウス)
6/15(月)	愛しすぎる家族	町田 政明
6/22(月)	部 社会復帰した本人の体験談 部 ステップについて	神田 博之(アパリ・スタッフ)
7/6(月)	境界線とは	町田 政明

【対象】薬物依存症などの諸問題を抱える家族、知人、友人、援助職従事者

【日時】第1・第3・第4月曜日18:30~20:30(祝日も開催します)

【場所】アパリ・クリニック上野2階 【参加費】3,000円(2名の参加は4,000円になります)

【内容】ファシリテーターと家族との分かち合いを行います。【予約】不要です

【お問合せは東京本部まで】

<個別相談・カウンセリング>

【対象】薬物依存症などの諸問題を抱える家族・本人など 【料金】45分 9,000円
【場所】アパリ東京本部 【カウンセラー】町田政明[元神奈川県立せりがや病院勤務、ホープビル代表、寿アルク理事] 【予約】アパリ東京本部 03-5830-1790 【注意事項】当日のキャンセルや変更の場合は全額いただきます。